

## 退職記念最終講義

### 私の教育と研究

—「国際教育，多文化間教育」と「アフリカ文学で読むアフリカ世界と現代」—

坂本 利子<sup>i</sup>

只今は田村副学部長から私の紹介について過分なお言葉をいただき、有難うございます。本日は早くも私の定年退職記念最終講義の日を迎えることとなり、受講生の皆さんと、この講義のために貴重なお時間を割いてご準備、ご参加いただきました教職員の皆様、諸先輩の皆様、遠方より来てくださった卒業生の皆さんに心より感謝申し上げます。

2003年度に産業社会学部に着任以来の私の教育と研究をふりかえりますと、2足の草鞋を履いて歩んできたと思います。ひとつはアフリカ研究や文化研究（ポストコロニアル研究）であり、もういっぽうは国際教育、多文化間教育にかかわってです。はじめに、私が産業社会学部に着任しました2003年前後とそれ以降の全学と学部の発展を、特に国際教育に関してお話させていただき、そのあとアフリカ研究について、私の教育・研究との関わりでお話し申し上げます。

#### 私の教育と研究—国際教育との関連で

産業社会学部では昨年度学部創設50周年を迎え、教職員の皆様のご尽力でさまざまな記念行事が無事成功のうちに執り行われました。その50年の歴史の中で、私自身が立命館学園とかかわることになったのは、1998年から国際関係学部で2年間非常勤講師として勤め始めたのがきっかけで、その後立命館アジア太平洋大学（以下、APU）に2000年の開学から3年間務め、2003年産業社会学部に着任して、今年2016年度で14年目になります。その間に、2004年から2005年度の学部国際化改革、2007年度の新カリキュラム改革、2010年度から本格的に議論が始まった次期カリキュラム改革、そして衣笠キャンパスの学部を横断した「国際インスティテュートプログラム」が2011年度を最後に募集を停止した後の学部独自の国際化教学改革など、それぞれ大きな改革の波を経験してきました。

2003年着任当時は、2000年に衣笠キャンパス5学部（法学部・産業社会学部・国際関係学部・文学部・政策科学部）を横断する国際化教学プログラムとして「国際インスティテュート」（以下、国際インス）が開設されて3年が経過した時期で、2000年当初は定員210名でスタートしていた国際インスには、「国際法務」「国際公務」「国際社会」の3つのプログラムが設置され、学生は学部によって所属するプログラムが割振られていました。産業社会学部と文学部は「国際社会」プログラムにそれぞれ35名の定員が設けられ、法学部は「国際法務」プログラム、国際関係学部、政策科学部、法学部は「国際公務」プログラムにそれぞれ35名ずつの

i 立命館大学産業社会学部教授，2017年4月より特別任用教授

定員が割り振られていました。その後、国際インスへの入試出願状況が定員の10倍から15倍という状況を背景に、2004年には定員を210名から410名へと倍増し、各学部の定員も倍増されました。また産業社会学部では2005年度に、当時の人間福祉学科に国際インスティテュート「国際福祉プログラム」（定員35名）が新設され、定員が2000年国際インスタート当時の35名から105名へと3倍に増員されることになりました。また2007年度の学部カリキュラム改革は、学部に5つの専攻を立ち上げ、外国語カリキュラム改革では、それまでの英語必修科目教育における英語専修コースを廃止し、英語重視コースと初修重視コースに整理するいっぽうで、学部英語副専攻プログラムを立ち上げ、それまでの全学英語副専攻に代わって、学部で英語の運用能力をさらに向上させたい学生たちに、Academic English を伸ばす A 群科目、学部の専門にかかわる内容を英語で学ぶ講義科目群の B 群科目、そしてオーストラリアでの海外研修科目（Study Abroad Program : SAP）C 群科目を開設し、初修外国語については全学副専攻科目「外国語コミュニケーションコース」が設置され、こうした改革を効果的に展開するために、外国語学習ハンドブックの創刊、それを活用して新入生への外国語ガイダンス実施、また社会問題について英語で発信する英語スピーチコンテスト、APU の国際学生との遠隔交流授業などをスタートさせて、国際化改革と外国語の07改革が完成しました。

学部横断型の国際教育、国際インプログラムは、立命館大学の国際教育を牽引しさまざまな成果を上げた一方で、増加する定員に対してそれを支える教学体制は必ずしも磐石とはいえなかったという課題もありました。また、その他いくつかの課題に直面した国際インスは2011年度の募集を最後に募集停止し、以降は立命館大学の国際教育は新たなフェーズを迎え、全学と学部の国際化教学は多様に展開されていくことになります。学部はそれぞれの教学に沿った独自の国際教育を展開し、産業社会学部でも英語副専攻と国際教育にかかわる専門科目、小集団科目、海外研修プログラムなどを組み合わせて、学部の教学にフォーカスした国際教育履修モデル「グローバルフォーカス」が2012年度に立ち上がり、今年度5年目を迎えます。「グローバルフォーカス」の立ち上げには、2010年度国際担当副学部長としてかわらせていただきましたが、当時の国際化推進委員会の教員と職員の皆様を中心に、学部全体で熱心な議論と果敢な実践を進めていただいたお蔭で実現しました。現在は2018年度のカリキュラム改革に向けた議論が進められており、新たな産業社会学部カリキュラムの誕生を楽しみにしているところです。

### 立命館アジア太平洋大学（APU）での経験

このように2003年度着任以来のさまざまなカリキュラム改革の波は、私の教育と研究にとって、大変大きな経験であったと思います。そして、もうひとつの大きな経験は、産業社会学部へ着任する前の3年間、APU で教鞭をとる機会を得たことで、APU での経験は、その後の私の教育に決定的な影響をもたらしました。多くの方がご承知のとおり、APU は多文化・多言語話者が存在する大学で、国内学生と国際学生がほぼ半数ずつ在籍し、教職員も約半数が海外出身者か海外経験者で、多様な背景をもつ人々で構成されています。APU 開学以来17年あまりが経過した今日では、初年次教育において国際学生も国内学生も全員が多文化間共修（協働学習）を経験し、学部生がTAとして徹底的に育成され協働学習のクラスをリードして、国内学生と国際学生の協働が進んでいます<sup>1)</sup>。私が勤めていた開学からの3年間は大学としてそうしたシステムはまだ整備されておらず、教員が個別で科目間の協働を模索していました。私自身も国内学生に英語科目を教える傍ら、国際学生を指導される日本語担当の先生がたと協力して、国内学生と国際学生のディスカッション、ディベートなどさまざまな学び合いの場を設定していきました。その時のネットワークと経験が、産業社会学部

着任後に国際教育とキャンパスにおける多文化間教育にかかわっていく際の基礎となっています。

産業社会学部で2003年から開講してきたAPUの国際学生との日英2言語での遠隔交流授業や、2005年から参加してきた台湾の大学生との遠隔交流と、高大連携でアジア諸国の学生・生徒たちと実施してきた「アジア学生国際交流プログラム」や「ワールドユースミーティング」などの国際交流、そして2011年から新たに開講している衣笠の国際学生（SKP生：Study in Kyoto Programに参加する短期留学生）との共修授業などは、キャンパスでも国際的学び合いの場を実現したいという希望から実践してきた教育であり、そうした多文化間共修教育をとおして、海外経験のない国内学生にも異文化体験と多文化間での協働学習の場を提供し、その後の留学や海外研修への動機づけや、留学や海外研修から帰国後にその学びを維持する場を提供することも願って開講しています。そして産業社会学部の学生がそうした協働学習や国際交流をとおして何を学んでいるかを研究してきました。このような教科書やマニュアルのない国際教育の経験から、学内外の文化的多様性を教育の資源とする多文化間共修の意義や必要性を共有する仲間と共に、今春『多文化間共修—多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する』を出版し、日本とオーストラリアの大学における研究および実践事例<sup>2)</sup>を紹介しました。学内外の多くの皆様のご支援と産業社会学部の教職員の皆様のさまざまなご協力なくしては、こうした取り組みは実現、継続しませんでした。この場を借りて深くお礼を申し上げます。

### 全学における多文化間共修の取り組み

全学における多文化間共修の取り組みはといいますと、多様な学部、大学院、全学のプログラムで、正課科目の中で、あるいは正課外活動において実践されてきました。たとえば2000年に開設された国際インスの科目や留学プログラムにおいて、また2009年に開設された学部横断の長期留学支援プログラムであるグローバル・ゲートウェイプログラム（GGP）の英語開講科目において、そして各学部や研究科の国際化教学に位置づけられた正課科目として開講されてきました。また正課外の活動としては、言語教育センターが主管するコミュニケーションルームの活動において、英語や初修外国語による学期に数回の交流会や、各言語で希望者を対象にLanguage Exchangeを行うもの、またキャリアセンターが主管する「グローバル人材養成プログラム」において、院生および学部生の国際学生と国内学生が混合チームを編成し、企業から提示されるテーマについて、TBL（Theme/Team-based Learning）やPBL（Problem-based/Project-based Learning）型の共同プロジェクトを遂行し、解決策を提案するものなど、多様なレベルでさまざまな取り組みがなされてきています。

2012年度と2013年度に国際部において副部長兼衣笠国際教育センター長の任にあった期間、国際部の同僚の教職員の皆さんと国際教育推進に重点的に取り組んだのは、派遣と受入れの拡大だけでなく、やはりキャンパスの国際化つまり学内における国際学生と国内学生との学び合いの推進でした。なぜなら9割以上の国内学生が留学や海外研修を経験することなく、留学生と対話する機会もほとんどなく、4年間をキャンパスで過ごし、留学生も日本に留学しながら、現地の学生との交流や協働学習の経験が非常に少ない状況は、いかにも残念だと考えたからです。それにキャンパスでの学び合い促進は、海外研修や留学への動機づけという要素を考えれば、派遣の機会拡大との相乗効果も期待でき、留学から帰国した学生たちの留学先での学びを維持・促進する機会にもなりうるからです。キャンパスの国際化は、2015年度から試行され2016年度には全面開講されている、全学共通教育の国際教養科目B群で展開されるようになりました。授業言語のレベルや国際交流の関わりの度合いに応じてステージ1から4の段階別に国際教養科目が開講され、正規留学生と短

期留学生，そして基本的に全学部の国内学生が受講できる「国際教養科目区分」（Theme Study と題して，担当者の専門のテーマについて学び合う科目群），「異文化交流科目区分」（異文化理解を促進する科目群），そして「海外留学科目区分」（留学にむけて準備するための科目群）の3区分で，それぞれ独自の共修科目が開講されています。

### 私のアフリカ研究，文化研究（ポストコロニアル研究）に関わって

さてここからは，私の研究と教育のもう一つの軸であるアフリカ研究，文化研究（ポストコロニアル研究）についてお話しさせていただきます。私の研究は，国際教育の一環としての異文化間交流，多文化間共修に一方の軸を置き，もう一方はイギリス留学中に経験した文化研究（ポストコロニアル研究）とアフリカ文学，アフリカ研究に軸を置いています。

アフリカ研究にかかわるようになったのは，大阪外大の交換留学プログラムでイギリスのエセックス大学に留学後，修士課程に進んで比較文化研究を行い，その後ロンドン大学のSOAS（School of Oriental and African Studies）の博士課程でアフリカ研究に携わることになったのがきっかけです。交換留学では，もともと興味を持っていた文学研究を専攻したのですが，その延長で修士課程に進学し比較文化研究を専攻することになりました。エセックス大学は1960年代に新しい教育を目指してイギリスに設立されたいわゆる New Universities のひとつで，60年代には学生運動の拠点となった大学で，左派的傾向が強いといわれています。私が留学した90年代初めは Cultural Studies，ポストコロニアル研究が盛んで，同大学でも各学部が個別に研究や教育をするだけでなく，文学，社会学，歴史学，その他さまざまな分野の教員が連携して，学際的な教育・研究が行われていました。私はそこで文学の伝統的な作家研究や作品研究というよりは，文学テキストや文学理論・文化批評のテキスト，たとえばエドワード・サイード，ホミ・バーバ，フランツ・ファノン，ガヤトリ・スピヴァクといった批評家たちの理論を使って，文化研究，ポストコロニアル研究の資料を読み解くという研究を始めました。そのときにポストコロニアル作家のひとり，南アフリカのナディン・ゴーディマというユダヤ系白人女性作家の作品と出会ったのが，アフリカ研究に進むようになったきっかけでした。

### 私の文化研究（ポストコロニアル研究）とは？

文化研究とポストコロニアル研究という分野は非常に学際的で，特定された研究の領域，理論，方法，原理というよりは，社会科学や文化人類学，歴史学，民俗学，哲学，心理学，言語学，文学批評，芸術，政治科学など，多様なディシプリンの理論と方法によって学際的に研究する分野です。1970年代後半から1990年代にかけて英語圏において急速に形成された研究領域で，コロニアル研究は西欧がその近代の成立過程で，帝国主義支配の下で行ってきた非西欧地域に対する領土的，文化的侵略，征服行為を批判的に分析するのに対して，ポストコロニアル研究は，かつての植民地（私の研究対象は主にアフリカ地域）が第二次世界大戦後政治的独立を果たした後も，さまざまな支配・被支配関係を継続し，諸問題を継続させてきたポストコロニアルな状況を対象とします。したがって「ポスト」が必ずしも植民地支配から開放された状況を意味するのではなく，独立後も植民地支配の歴史がなおその文化，社会，政治，経済に色濃く影響を及ぼしている状況をポストコロニアルと呼び，ポストコロニアルな政治状況に権威付けられた多様な領域のテキストを読み直し，植民地支配的な言説による歴史の作り変えや文化的表象による捏造を明らかにする作業が，私のポストコロ

ニアル研究です。それは特定の地域研究でも、特定の文化を研究する文化研究でもなく、社会のさまざまな文化的営み（たとえば顕著な例がメディアによるニュース報道や映像による文化表象など）がどのような権力関係の中で行われているか、すなわち社会と世界、歴史と政治、文化の中の力関係・権力構造が、どのように文化的営みに影響を及ぼしているかなどを見ています。それは、メディアや文学テキストの語りが、その社会の政治的歴史的状況を映す「政治的無意識—社会的象徴行為としての物語」（F. ジェイムソン、1981）<sup>3)</sup>であることを明らかにする作業と言い換えることができます。

### 私のアフリカ研究—西欧のアフリカ観からの脱却

第二次世界大戦後、世界中で多くの国々が植民地支配からの独立を果たし、アフリカでも1960年だけで17か国が独立しましたので、この年は「アフリカの年」と呼ばれています。そして1960年代に現アフリカ55か国のうち、32か国が脱植民地化を実現しました。一方アフリカの旧宗主国はというと、イギリス（アフリカ14か国を植民地支配）、フランス（17か国）、ポルトガル（5か国）、ドイツ（4か国）、ベルギー（3か国）、イタリア（2か国）、スペイン（2か国）などの西欧7か国です。アフリカ社会はそうした西欧列強によって、15世紀以降の奴隷貿易や植民地支配をとおして、また20世紀の脱植民地化以降も実質的支配構造が継続された新植民地主義をとおして、そしてその支配構造を基盤に今日「グローバリズム」の名のもとに行われている資源や労働力、そして市場などの支配をとおして、約500年にわたって一方的に暴力的支配を受けてきたこととなります。またその支配は、政治や経済の分野だけでなく、さまざまなメディア、文化表象においても影響を及ぼし、ゆがめられたアフリカ像を生産そして再生産してきました。たとえば「歴史や文明を持たないアフリカ」といったアフリカ観は、アフリカ人を蔑視するだけでなく、アフリカ人自身の内面の自己理解にも影響をおよぼし、文化的、思想的支配に寄与してきました。なぜなら文化は、意味や価値、知識や言説を生産する装置（システム）であり、西欧近代の成立過程とポストコロニアルな状況において、表象の社会的文化的システムと政治力学が密接な関係を持って機能し、西欧が近代的自己を確立するために必要であった非西洋を自己認識と他者認知において周縁化し、他者性を構築し他者としてのアイデンティティを確定し、西洋と非西洋を文明と野蛮、先進と後進、中心と周縁という二項対立で表してきた言説と表象システムが、アフリカと言えば未開、野蛮、非文明、貧困といった言説を再生産し続けてきたからです。グローバル化が進展する今日、アフリカの問題が提起するものは、そうした西欧中心主義を相対化することによって西欧のアフリカ観から脱却し、グローバル資本と富の不平等な流れを見直し、「グローバリズム」とは何かを問い直すことであると考えます。

現代のアフリカを理解するには、歴史的文脈でとらえることが必要です。アフリカは近代の歴史において、特に西洋史において他の地域とは切り離された絶対的に異質な存在、「絶対的他者」として位置づけられ、「文明を持たない」暗黒大陸アフリカとして表象されることが多く、政治や経済の分野でもアフリカは多くの場合「援助の対象」とされてきました。また民族間（アフリカの民族は「部族（tribe）」と称されることが多く、ここでも後進性が強調されます）の対立の絶えない未開で野蛮なアフリカ、内戦によって荒れ果てた原始的社会の象徴のように何世紀にもわたって表象されてきました。それは過去の話ではなく、現代でも欧米のメディアはアフリカの負のイメージを拡散しています。たとえばアメリカの *Newsweek* は、2000年にアフリカのエイズ患者の増加による孤児の急増を報じ、イギリスの週刊経済誌 *The Economist* は内戦の続くアフリカを「どうしようもない大陸（The hopeless continent）」と評して、いずれもアフリカの歴史の負の遺産を強調し

ています。もちろん数世紀にわたって西欧の支配を受けてきたアフリカの現実には厳しく、植民地支配の負の遺産としての内戦や貧困は厳然とした事実ですが、経済発展や民主化の進展、豊かな文化資源や教育の拡大など、積極的なアフリカの発展について取り上げられる機会は非常に限られています。

欧米の作家やメディアが作り上げてきたアフリカ像は、たとえば20世紀前半に書かれた植民地文学、ジョイス・ケアリー (Joyce Cary) の『ミスター・ジョンソン』 (*Mister Johnson*) (1939) や、ジョゼフ・コンラッド (Joseph Conrad) の『闇の奥』 (*Heart of Darkness*) (1902) に代表されます。『ミスター・ジョンソン』に描かれている黒人、ミスター・ジョンソンは、大英帝国時代の植民地であったナイジェリアを舞台に、子どもじみた人物像が描かれていますし、『闇の奥』はそのタイトルが示すように、アフリカのコンゴ川流域の奥地を闇と恐怖の地として描き、コンゴ川上流の奥地に住みつき原住民族化したイギリス人クルツは後にその地で病死するのですが、彼の心の闇を描きつつ、アフリカの闇と死、病気、蛮人による攻撃への恐怖などを表象して、「文明から取り残された暗黒大陸」というアフリカ像を象徴しています。

一方アフリカの作家たちはというと、多くのアフリカ人作家は、アフリカの人々を欧米の作品が他者の枠組みに位置づけることに異議を唱え、アフリカ人のアイデンティティやアフリカ人の考え方、アフリカの豊かな伝統や文化を描いています。イブ・アイゼンバーグ (Eve Eisenberg) (2013) がアフリカ文学の特性について書いているように、多くのアフリカ人作家は、芸術を通じた「抵抗運動の活動家であり、芸術作品そのものが抵抗行為である」<sup>4)</sup> といえます。ナイジェリアの作家で、「アフリカ英語小説の父」、あるいは「アフリカ英語の父」<sup>5)</sup>、「アフリカ文学の父」とも称されるチヌア・アチェベ (Chinua Achebe) (1930-2013) は、「西欧の現代文学は、民衆とは隔絶された個人の内面を追求するあまり、そこには世界を変革する期待すら望めない空虚さが漂っている……私の作品は（西欧社会が描いた）現代アフリカの歴史を言い換えたもので、そこには重要な政治的意図が含まれている」<sup>6)</sup> と述べ、20世紀の文学遺産としてのアフリカ文学の政治的役割を指摘しています。アチェベの代表作であり、アフリカ文学の正典的作品である『崩れゆく絆』 (*Things Fall Apart*) (1958) についてアイゼンバーグは、「彼はよく知られているように、西洋の文学作品、特にジョイス・ケアリーの『ミスター・ジョンソン』 (1939) や、ジョゼフ・コンラッドの『闇の奥』 (1902) に表象されているアフリカ人の人種差別的表象に対抗するために、この小説を書いたと述べている」(p.9) と書いています。アチェベと同様に彼に続く多くのアフリカ人作家も、西欧が何世紀にもわたって描いてきた「原始的」で民族間の衝突で引き裂かれ荒れ果てたアフリカ社会像、そして西欧文明から隔絶された絶対的他者、非文明的民族としてのアフリカ像に対して異議を唱え、アフリカ人自身の声でアフリカ世界を描くこと、アフリカ人の声を世界に届けることを作家活動で実践しています。

### アフリカ文学で読むアフリカ世界と現代

さて、本教養ゼミナール「アフリカ文学で読むアフリカ世界と現代」で主に取り上げているのは、21世紀の新しいアフリカを表象する新時代のアフリカ文学作品です。たとえば南アフリカの Nadine Gordimer や Zoe Wicomb は20世紀に作家活動を始めましたが、21世の新しい作品、Gordimer (2012) と Wicomb (2014) には、南アフリカのポストアパルトヘイト期における民主化過程の社会と人々、そしてさまざまな課題が描かれています。またナイジェリアの Chimamanda Ngozi Adichie や Sefi Atta はナイジェリアからアメリカに移住し、ディアスポラ作家としてアメリカから、ナイジェリアの今日の状態について歴史的経験を背景に描いています (Adichie, 2003; 2006; 2008; 2009; Atta, 2010)。イスラム圏のアフリカ人作家、モロッコの Leila

Abouzeid (2005; 2009) やスーダンの Leila Aboulela (2016) は、イスラム社会における植民地支配の歴史を背景に新しい女性の生きざまを描き、ガーナの Ama Ata Aidoo (2007) の新しい作品は、新しい時代の女性の可能性を描いています。このように21世紀のアフリカ文学は、現代のアフリカ世界が決して紛争や貧困、病気だけの暗黒大陸ではないこと、豊かな文化をはぐくんできた大陸であり、可能性と希望の大陸であることを私たちに示しています。

最後に、現代の英語で書かれたアフリカ文学の中で、今最も注目されている作家のひとりでナイジェリア出身の女性作家、チママンダ・ンゴズィ・アディーチェ (Chimamanda Ngozi Adichie) について紹介します。彼女は1977年にナイジェリア南東部のエヌグ市で生まれ、19歳でアメリカに留学し、留学後アメリカに移住して作家活動を続けながら、毎年夏には帰国し、ナイジェリア人に文章の書き方や創作を教えています。ナイジェリアには371のいわゆる「部族 (tribe)」が存在しますが、そのうちの3大部族 (ハウサ、イボ、ヨルバ族) のひとつであるイボ (Igbo) 族 (イグボ族ともいう) の出身で、母親は大学理事、父親は大学教授という中流階級の出身であり、彼女の作品に登場する人物も中・上流階級、知識階級の職業人が多く、西欧の植民地文学が描いた「物言わぬアフリカ、奇声を発するアフリカ人」ではなく、自分の言葉で政治を語り、芸術を生み出し、歴史を書き直すことのできる新時代のアフリカ人が登場します。

彼女の作品は自伝的要素を多分に含んでいるとされていますが、彼女の最初の小説『パープル・ハイビスカス』 (*Purple hibiscus*) (2003) を評してジョンホプキンス大学のある教授が、この作品は「本物のアフリカ (Authentic Africa) を描いていない」と批判したのに対して、彼女は評論「『本物』のアフリカとビアフラの経験 (African “authenticity” and the Biafran experience)」 (2008) の中で次のように反論しています。

私の登場人物は、教育を受けた中流階級でした。車を運転もしましたし、飢えていたわけでもありません。なので、本物のアフリカ人ではないとされました……私は画一的な本物というものが存在するとは考えません。本物である唯一のアフリカが存在すると主張することは、アフリカの経験を矮小化してしまうことになるからです。<sup>7)</sup>

アフリカといえば、西欧列強による植民地支配の歴史と、貧困、民族間の対立や紛争、政治の腐敗など、独立後のさまざまな政治、経済の課題に焦点を当てて、欧米の視点から語られることが多いのですが、21世紀に入って英語で書かれたアフリカ人作家による文学作品には、欧米の文学や紀行文、メディアなどによって人種差別的に歪められ、あるいは消されてしまったアフリカの過去を再構築し、そこから派生する課題を見つめ、現代のアフリカ世界を興味深く描いた作品が数多くあります。

アディーチェの2冊目の小説『半分のぼった黄色い太陽』 (*Half of a yellow sun*) (2006) はナイジェリアの内戦、ビアフラ戦争 (1967-1970) を扱った作品です。1960年にナイジェリアが英連邦から独立して7年足らずで、東部州に住む有力民族であるイボ族が中心となって、ビアフラ共和国建国とナイジェリアからの独立を宣言し内戦を戦いましたが、わずか3年ほどで敗北しました。このビアフラ共和国の国旗に描かれた黄色い太陽と挫折した独立の試みにちなんで小説の題名がつけられ、2014年にハリウッドでも映画化されています。内戦と殺戮という凄惨な歴史を背景に描きながらも、若い登場人物たちのリアルな生活とラブストーリーを描き、何とも人間の可笑しさを描くことに抜群の才能を発揮した作品であり、イボ族の村の青年がビアフラの歴史を書き直すという伏線も敷かれて登場人物とビアフラの物語が交差しながら描かれています。『半分のぼった黄色い太陽』は長編小説ですが、最後まで読者の興味を引き続けるのは、登場人物の間の関係についての

さまざまなストーリーが、ナイジェリアとビアフラ間の内戦にまつわる歴史的要因やその展開についてのストーリーと交錯し合って小説を巧みに構成しているからです。また主要な登場人物の多くは上流階級出身であるため、この小説はナイジェリアの社会や経済的特徴について私たちがもっている先入観を覆し、アフリカへの新たな興味や現代アフリカの別の側面への視野を拓けてくれる作品だと思います。

現在私が取り組んでいる研究は、こうした英語で書かれた新しいアフリカ文学研究で、アフリカ人自身の視点から自らの歴史、アイデンティティを再構築し、現代のアフリカの生活やアフリカ人の考え方、価値観を明らかにしている作家たちの研究です。アフリカ研究は日本ではマイナーな研究領域ですが、私はこの研究を通して、アフリカ諸国の文化、社会、人々や価値観などについて背景的知識を拓げるだけでなく、21世紀のアフリカと私たち日本人の対話のささやかな場を開くことができればと考えています。

## 注

- 1) 秦喜美恵, 平井達也 (2017) 「すべての新生児に多文化間共修を！：立命館アジア太平洋大学の事例」坂本利子, 堀江未来, 米澤由香子編著『多文化間共修－多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する』（学文社）179－206頁。
- 2) 坂本利子, 堀江未来, 米澤由香子 (2017) 『多文化間共修』において、メルボルン大学高等教育研究所が中心になって実施した、オーストラリアの大学での学生間交流を促進するための調査研究の成果、および北海道大学、東北大学、名古屋大学、APU、および立命館大学の事例を紹介。
- 3) Jameson, F. (1981). *The political unconscious: Narrative as socially symbolic act*. London: Methuen.
- 4) Eisenberg, E. (2013). 'Real Africa'/'Which Africa?': The critique of mimetic realism in Chimamanda Ngozi Adichie's short fiction. In E. N. Emenyonu *et al.* (Eds.), *Writing Africa in the short story: African literature today 31* (p. 8). Ibadan: James Currey.
- 5) 大橋克洋 (1994) 『部族分断』（青磁書房）ii 頁。
- 6) Achebe, C. (2006). An image of Africa: Racism in Conrad's *Hear of Darkness*. In P. B. Armstrong (Ed.), *Hear of darkness: Authoritative texts, backgrounds and contexts, criticism* (p. 336). New York: W. W. Norton & Co.
- 7) Adichie, C. N. (2008). African 'authenticity' and the Biafran experience. *Transition*, No. 99 (p. 48). Bloomington: Indiana University Press.

## 参考文献

### 日本語文献

大橋克洋 (1994) 『部族分断』（青磁書房）。

くぼたのぞみ訳 (2010) 『半分のぼった黄色い太陽』（河出書房新社）。

坂本利子, 堀江未来, 米澤由香子編著 (2017) 『多文化間共修－多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する』（学文社）。

坂本利子 (2013) 「異文化交流授業から国内学生は何を学んでいるか－多文化共生力育成をめざして－」『立命館言語文化研究』24巻3号, 143-157頁。

坂本利子, 吉田信介, 本田明子, 片山智子, 和田綾子 (2006) 「遠隔交流授業における異文化理解と異文化コミュニケーション教育」(科研費報告書)。

坂本利子, 吉田信介 (2006) 「立命館大学・立命館アジア太平洋大学遠隔交流授業およびアジア学生交流プログラムにおける国際交流－掲示板・チャット記録の分析」『立命館産業社会論集』41巻4号, 143-154頁。

坂本利子, 吉田信介, 宇根谷孝子, 本田明子, 片山智子, 和田綾子 (2006) 「立命館大学と立命館アジア太平洋大学



間の日英語クラス遠隔交流授業」『立命館高等教育研究』6号, 1-16頁。

秦喜美恵, 平井達也 (2017) 「すべての新入生に多文化間共修を! : 立命館アジア太平洋大学の事例」坂本利子, 堀江未来, 米澤由香子編著『多文化間共修—多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する』(学文社) 179-206頁。

#### 英語文献

Aboulela, L. (2016). *The kindness of enemies*. London: Weidenfeld & Nicolson.

Abouzeid, L. (2009). *Year of the elephant: A Moroccan woman's journey toward independence and other stories*. Austin: Centre for Middle Eastern Studies, University of Texas.

——— (2005). *The director and other stories from Morocco*. Austin: Centre for Middle Eastern Studies, University of Texas.

Achebe, C. (2006). An image of Africa: Racism in Conrad's *Heart of Darkness*. In P. B. Armstrong (Ed.), *Heart of darkness: Authoritative texts, backgrounds and contexts, criticism* (p. 336). New York: W. W. Norton & Co.

——— (1958). *Things fall apart*. London: Heinemann.

Adichie, C. N. (2009). The danger of a single story. TED Global Talk.

——— (2008). African 'authenticity' and the Biafran experience. *Transition*, 99, 42-53. Bloomington: Indiana University Press.

——— (2006). *Half of a yellow sun*. London: Fourth Estate.

——— (2003). *Purple hibiscus*. Chapel Hill: Algonquin Books.

Aidoo, A. A. (2007). *African love stories: An anthology*. Banbury, UK: Ayeibia Clarke Publishing.

Armstrong, P. B. (Ed.). (2006). *Heart of darkness: Authoritative texts, backgrounds and contexts, criticism*. New York: W. W. Norton & Co.

Atta, S. (2010). *News from home: Stories*. Northampton, Massachusetts: Interlink Books.

Cary, J. (1939). *Mister Johnson*. Reprinted in 1961, London: Michael Joseph.

Conrad, J. (1902). *Heart of darkness*. Reprinted in 1950, New York: Signet.

*The Economist* (2000, May 13). The hopeless continent, front page.

Eisenberg, E. (2013). 'Real Africa'/'Which Africa?': The critique of mimetic realism in Chimamanda Ngozi Adichie's short fiction. In E. N. Emenyonu, *et al.* (Eds.), *Writing Africa in the short story: African literature today 31* (p. 8). Ibadan: James Currey.

Emenyonu, E. N., Emenyonu, P. T., Bryce, J., Eke, M. N., Newell, S., Nnolim, C. E., *et al.* (Eds.). (2013). *Writing Africa in the short story: African literature today 31*. Ibadan: James Currey.

Gordimer, N. (2012). *No place like home*. London: Bloomsbury.

Jameson, F. (1981). *The political unconscious: Narrative as socially symbolic act*. Ithaca, N.Y.: Cornell University Press.

*Newsweek* (2000, May 13-20) 10 million of orphans, front page.

Wicomb, Z. (2014). *October: A novel*. London & New York: The New Press.

## 坂本 利子教授 略歴と業績

### I. 略 歴

1951年 6月	大阪府に生まれる
1974年 3月	南山大学外国語学部英米学科卒業
1994年 7月	エセックス大学大学院修士課程修了
2001年 7月	ロンドン大学アジアアフリカ研究学院博士課程修了
2000年 3月	立命館アジア太平洋大学常勤講師
2003年 4月	立命館大学産業社会学部教授
2017年 3月	学校法人立命館定年退職
2017年 4月	立命館大学特別任用教授

#### (主な学内役職歴)

2005年 4月～2007年 3月	アメリカン大学との学部共同学位プログラム DUDP コーディネーター
2010年 4月～2011年 3月	学部国際担当副学部長
2012年 4月～2014年 3月	国際部副部長
2012年 4月～2014年 3月	衣笠国際教育センター長

### II. 専門分野

専門分野	文化研究, ポストコロニアル研究, アフリカ研究, アフリカ文学
担当科目	卒業研究 (国際ゼミ), 専門特殊講義Ⅱ (衣笠国際学生との異文化間交流), 専門特殊講義Ⅱ (APU 国際学生との異文化間交流), Theme Study — Comparative Perspectives on the Media Representation of World News, 英語 5 Broadcasting Media, 英語 6 Print Media, 教養ゼミナール (アフリカ文学で読むアフリカ世界と現代)
研究課題	ポストコロニアルロンドンとアフリカ, 21世紀のアフリカ文学, 多文化間共修
学位	文学博士 (ロンドン大学, 2001年 7月)
所属学会	日本英文学会, 日本アフリカ学会, 国際アフリカ文学会, 留学生教育学会

### III. 主な研究業績

#### 著 書

1. (共著) *Your World: Global Issues for English Learners* (Pacific Interactive Press, 2002年) 24-29, 64-69頁
2. (単訳) 「過去からのスナップ写真: 新しい未来を築くために, 過去の痛みを認めること (Meer, S.

- (2004) Snapshots from the past: owning past pain to build a new future)」(『痛み、怒り、癒し：暴力と女性の語り』, 大阪外国語大学グローバル・ダイアログ研究会編, 2005年) 90-99頁
3. (共訳)『痛みと怒り：圧政を生き抜いた女性のオーラル・ヒストリー』(武田佐知子編, 明石書店, 2006年) 159-173頁
  4. (単著)『ナディン・ゴードイマが描いた南アフリカ社会—人種, ジェンダー, セクシュアリティが交差する国家と家族のポリティクス』(第三書館, 2016年) 全296頁
  5. (共編著)『多文化間共修—多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する』(坂本利子・堀江未来・米澤由香子編著, 学文社, 2017年) 155-178頁

## 論文

1. (単著) South Africa's discourse of domination and Nadine Gordimer's protest against Apartheid (MA Dissertation submitted to University of Essex, 1993年)
2. (単著) The colonial daughter's narrative: The politics of race, gender and sexuality in Nadine Gordimer's fiction (Ph D Thesis submitted to the School of Oriental and African Studies, University of London, 2001年)
3. (単著) Black women in Nadine Gordimer's *None to Accompany Me* (*Africa Update*, Central Connecticut State University 8巻2号, 2006年) 3-6頁
4. (単著) The politics of place and the question of subjectivity in Nadine Gordimer's *Burger's Daughter* (『立命館言語文化研究』13巻4号, 2002年) 261-277頁
5. (単著) Coloured identity and cultural transformation in Nadine Gordimer's *My Son's Story* (『立命館言語文化研究』14巻1号, 2002年) 313-330頁
6. (単著) The colonial daughter's narrative: Race, gender and sexuality in Nadine Gordimer's *The Lying Days* (『英米文学研究』79巻1号, 日本英文学会, 2002年) 15-36頁
7. (単著) The colonial discourse on women and national identity (Work paper from Goldsmith's College, University of London, Special Issue, 2002年) 21-30頁
8. (単著) Nadine Gordimer's *None to Accompany Me*: The new context of freedom and empowerment in Post-Apartheid South Africa (『立命館言語文化研究』14巻3号, 2002年) 225-240頁
9. (単著) Writing culture: The dynamics and ambiguity of ethnographic production. (『立命館産業社会論集』40巻4号, 2005年) 1-17頁
10. (共著)「立命館大学と立命館アジア太平洋大学間の日英語クラス遠隔交流授業」(坂本利子・吉田信介・宇根谷孝子・本田明子・片山智子・和田綾子, 『立命館高等教育研究』6号, 2006年) 1-16頁
11. (共著)「立命館大学・立命館アジア太平洋大学遠隔交流授業およびアジア学生交流プログラムにおける国際交流—掲示板・チャット記録の分析」(吉田信介・坂本利子, 『立命館産業社会論集』41巻4号, 2006年) 143-154頁
12. (単著)「ロンドンの多民族多文化コミュニティにおける地域再生—北ウェストミンスターNPO法人, 『パディントン開発基金』とローカル・パートナーシップ—(上)」(『立命館産業社会論集』44巻1号, 2008年) 117-135頁
13. (単著)「ロンドンの多民族多文化コミュニティにおける地域再生—北ウェストミンスターのNPO法

- 人、『バディントン開発基金』とローカル・パートナーシップ—（下）』（『立命館産業社会論集』44巻2号，2008年）47-65頁
- 15.（単著）「南アフリカの真実和解委員会と女性たちの証言」（『立命館言語文化研究』23巻2号，2011年）83-92頁
- 16.（単著）「異文化交流授業から国内学生は何を学んでいるか—多文化共生力育成をめざして—」（『立命館言語文化研究』24巻3号，2013年）143-157頁
- 17.（単著）「南アフリカの民主化過程における女性運動と市民社会（上）」（『立命館産業社会論集』51巻1号，2015年）255-271頁
- 18.（単著）「南アフリカの民主化過程における女性運動と市民社会（下）」（『立命館産業社会論集』51巻2号，2015年）57-71頁

#### その他

- 1.（共著）「インターネット，TV会議システム，対面交流を活用した遠隔交流授業—立命館大学と立命館アジア太平洋大学間の場合」（吉田信介・坂本利子・本田明子・片山智子，『日本教育工学会第21回全国大会講演論文集』，日本教育工学会，2005年）661-662頁

#### IV. 社会における活動

- 2012年4月～2014年3月 公益財団法人大学コンソーシアム京都 国際連携事業運営委員
- 2013年4月～2014年3月 公益財団法人大学コンソーシアム京都  
海外留学派遣プログラム開発支援事業運営委員

以上